画図百器
徒然袋
壽
中

画図百器徒然袋巻之中

○鎗毛長 ○禅釜尚 ○鐙口 ○不落々々 ○髪女 ○袋貉 ○琵琶牧々 ○襟立衣 ○乳鉢坊 瓢箪小僧 ○如意自在 ○箒神

○虎隠良 ○鞍野郎 ○松明丸 ○貝児 ○角盥漱 ○琴古主 ○三味長老 ○経凛々 ○木魚達摩 ○暮露々々団 ○蓑草鞋

鎗毛長

日本無双の剛者の
まよふさとなりし毛は
ふか怪しきと見え
あやしまれもつ先
うなぎのまがると
わしらん
虎豈良
たけき獣の
革かし
製しする
きんちやくと
みやそのうき
よし千里を
そしるら
ぞとし

禅釜尚
茶ハ閑寂を主として もろ／＼の陰気あれば かゝる怪異もありぬべし 文福茶釜のためしもあれば と 夢の中に思ひぬ

鞍野郎

保元の夜軍に
鎌田政清
がくらを
かせしも我也へ
あつさバいかなる
恩をもまなぶべきに
まぐさを食んと
前輪のあたりを
こずゑつからるれバ幸も
魂もさくくとありしをおもひえ(く)
嘶ふ声いとかなしく
夢のうちにおもひぬ

中 之 二

鐙口

膝の口をのぶのふ
んさもくあぶみと
聞しておもたらんと
もふしじもし
ちんぎの
よみきばと
おなじく
うすふと
見人も
おいがくぬ

松明丸
松明の名ハ
あれども深山
幽谷の松杉木
を住家とせしか
なかる天狗つぶての
石よりもる光なるべしと夢心におもひぬ

不落々（ぶら〳〵）

山田なる挑灯の
火とハみゆれ
どもまことハ
闇にまよ
ふこゝろをまどはし
狐火ぶら〳〵
と
ゆめのうちに
おもひぬ

貝児(かいちご)

貝おけ這子なと
ゑくるハやんごとなき
御かたの調度にして
おろそかならぬものなれバ
この貝児ハ這子の兄弟よやと
とおぼつかなく夢んに思ひぬ

髪鬼

身體髪膚ハ父母の遺體なるを千すじの落髪を泥土に汚したる罪にかゝるくるしみをうくるなりといふを夢ごころにおぼえぬ

角盥漱（つのはんざう）

心を種とく
しき艸のうみも
まねく小野の小町が
さうしあらいの執心
なるべしと夢心におもひぬ

袋狢（ふくろむじな）
穴のむじなの道をしるとハ
いかにかきことのたとへは
いつまで袋のうちの
むじなも同じこと
おそらく糸を遊ぶ
猟師のたわふれハ
まことに袋の
ものをさぐるが
ごとくならんと
夢のうちに
おもひぬ

琴古主

八橋とかいへる瞽しやの
しらべをわたりしより
つくし琴ハ名のミにして
その音いろをきゝて知れる
人さへまれなれバその
うらみをあつめんとてや
かゝる姿をあらはしけんと
夢心におもひぬ

琵琶牧々
玄上牧馬といへる琵琶ハいにしへの
名器にしてふしぎたび〳〵あり
ありしバをはがくるの
びその精にして
ゑふよやと夢の
うちにおもひぬ
びく〳〵と

三味長老

諺に沙弥から長老にハなられずとハ沙弥ハ渇食のいまだきよう國師も老の若きハいふまがうきの如くなれども是ハ其の器にんのうなる人のけらの長ずるをもつて用ひられしその人の器常精あるべしと夢の中に思ひぬ

襟立衣
比良山の次郎坊白峯の相模坊
大山の伯耆坊いづなの三郎富士太郎
その外木の葉天狗まで羽団扇の
風にあふぎひらかれし今の山は
僧正坊の
襟立衣
あつくしと
夢心に
おもひぬ

経凛々（きやうりんりん）と

たふとき経文のかゝるあやまちハ咒咀（しゆそ）諸毒（しよどく）薬（やく）のかへつてその人ハ悩せし守敏（しゆびん）僧都（そうづ）のようて捨られし経文ならしと夢こゝろにおもひぬ

木魚達磨

如意自在

如意ハ痒ところをかく具なり　おもふところへとゞくゆへに如意の名あり　これバかく爪のかたちも痒ところへ手のとゞくごとくなるべけれどと夢心に思ひぬ

暮露〻団

普化禅宗を虚無僧といふ
虚無堂じゆくをもはらとしている
ところ薦むしろに座しても
たゞりとよる由へまさに薦僧
しいへるよし職人づくし
歌合に暮露〻とも
よめるばかりの世捨人の
まふるちるぶろぶとん
まやまや夢の中に
たわひぬ

箒神

蛇ハ竜としたるごとく次第に
わかし林間に酒をあたゝめて
ひるとし紅葉の
仕丁のそこゝあつめ
ねるそてきすてと
箒ゟよ
たゝひぬ

蓑草鞋
雪ハ鵞毛に似て飛で散乱し
人ハ鶴氅をきて立て徘徊
すとそのふる蓑の妖なる
にやと夢の中に
おもひぬ